

## 第 1 章

# 必要最低限の圏論

### 1.1 諸定義

ものの集まりを**クラス** (class) と呼ぶことにする<sup>\*1</sup>。3つのもの  $\mathcal{C}$  は以下の要素からなるとする：

- (1) クラス  $\text{Ob}(\mathcal{C})$ 。その元は**対象** (object) と呼ばれる。
- (2)  $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して定まる**集合**  $\text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$ 。
- (3)  $\forall X, Y, Z \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して定まる**写像**  $\circ : \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \times \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z) \rightarrow \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Z)$ 。

!

- 集合  $\text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$  は記号として  $\text{Hom}(X, Y)$  とか  $\mathcal{C}(X, Y)$  と書かれる。
- 元  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$  のことを  $X$  から  $Y$  への**射** (morphism) と呼び、 $f: X \rightarrow Y$  と書く。
- 写像  $\circ$  のことを**合成** (composite) と呼ぶ。射  $f: X \rightarrow Y$  と  $g: Y \rightarrow Z$  の合成は  $g \circ f: X \rightarrow Z$  と書かれる。

#### 定義 1.1: 圏

$\mathcal{C}$  が**圏** (category) であるとは、次の2条件を充たすことを言う：

- (1)  $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して**恒等射** (identity) と呼ばれる射  $1_X \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, X)$  が存在して、  
 $\forall W, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  および  $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(W, X), \forall g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$  について以下が成り立つ：

$$1_X \circ f = f, \quad g \circ 1_X = g$$

- (2)  $\forall X, Y, Z, W \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  と  $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y), \forall g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z), \forall h \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Z, W)$  に対して**結合則** (associativity) が成り立つ。 i.e.

$$(h \circ g) \circ f = h \circ (g \circ f) \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, W)$$

- $\text{Ob}(\mathbf{Sets})$  を全ての集合とし、それらの間の全ての写像を射とし、 $\circ$  を通常の写像の合成とするものの集まり  $\mathbf{Sets}$  は圏を成す。

<sup>\*1</sup> 集合全体の集合を考えると Russell のパラドクスに陥る。これを避けるために、集合よりも上位の概念であるクラスを新しく導入する必要がある。なお、考察の対象とする集合の範囲を**宇宙** (universe) という大きな集合に属するものに限る流儀もある。この場合、圏を扱うときに既知の集合論をそのまま適用できるが、集合論の公理に宇宙の存在の公理を追加する必要がある。

- $\text{Ob}(\mathbf{Top})$  を全ての位相空間とし、それらの間の全ての連続写像を射とし、 $\circ$  を通常の写像の合成とするものの集まり  $\mathbf{Top}$  は圏を成す。
- 可換環  $R$  について、 $\text{Ob}(R\text{-}\mathbf{Mod})$  を全ての  $R$  加群とし、それらの間の全ての  $R$  準同型を射とし、 $\circ$  を通常の写像の合成とするものの集まり  $R\text{-}\mathbf{Mod}$  は圏を成す。

#### 定義 1.2: 小圏・モノイド

- $\text{Ob}(\mathcal{C})$  が集合であるような圏  $\mathcal{C}$  は**小圏** (small category) と呼ばれる。
- $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  が一点集合であるような圏  $\mathcal{C}$  は**モノイド** (monoid) と呼ばれる。

#### 定義 1.3: 単射, 全射

$\mathcal{C}$  を**圏**,  $A, B \in \text{Ob}(\mathcal{C})$ ,  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(A, B)$  とする。

- $f$  が**単射** (monomorphism) であるとは、 $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して写像

$$\begin{aligned} f^*: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, A) &\longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, B), \\ g &\longmapsto f \circ g \end{aligned}$$

が集合の写像として単射であること。

- $f$  が**全射** (epimorphism) であるとは、 $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対してに対して写像

$$\begin{aligned} {}^*f: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(B, X) &\longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{C}}(A, X), \\ g &\longmapsto g \circ f \end{aligned}$$

が集合の写像として単射であること。

#### 定義 1.4: 同型射

圏  $\mathcal{C}$  と射  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$  をとる。

- $f$  が**同型射** (isomorphism) であるとは、

$$\exists g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, X), \quad g \circ f = 1_X \quad \text{かつ} \quad f \circ g = 1_Y$$

が成り立つことを言う。このときの射  $g \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, X)$  のことを  $f$  の**逆** (inverse) と呼ぶ。

- 同型射  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$  が存在するとき、 $X$  と  $Y$  は**同型** (isomorphic) であると言う。
- 対象  $X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  について、 $\text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, X)$  の元のうち同型射であるもの全体の集合は合成によって群を成す。この部分集合を  $\text{Aut}_{\mathcal{C}}(X) \subset \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, X)$  と書き、 $X$  の  $\mathcal{C}$  における**自己同型群** (automorphism group) と呼ぶ。

### 定義 1.5: 部分対象

$\mathcal{C}$  を圏とする.

- $A \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  の **部分対象** (subobject) とは,  $B \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  と **単射**  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(B, A)$  の組  $(B, f)$  のことを言う.
- $A \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  の部分対象  $(B, f), (C, g)$  が**同値** (equivalent) であるとは, ある **同型射**  $\varphi \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(B, C)$  であって  $g \circ \varphi = f$  を満たすものが存在することを言う<sup>a</sup>.

---

<sup>a</sup>  $B \simeq C$  や  $f \simeq g$  と略記することがある.

### 定義 1.6: 商対象

$\mathcal{C}$  を圏とする.

- $A \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  の **商対象** (quotient object) とは,  $B \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  と **全射**  $f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(A, B)$  の組  $(B, f)$  のことを言う.
- $A \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  の部分対象  $(B, f), (C, g)$  が**同値** (equivalent) であるとは, ある **同型射**  $\varphi \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(B, C)$  であって  $\varphi \circ f = g$  を満たすものが存在することを言う<sup>a</sup>.

---

<sup>a</sup>  $B \simeq C$  や  $f \simeq g$  と略記することがある.

### 定義 1.7: 充満部分圏

2つの圏  $\mathcal{C}, \mathcal{D}$  をとる. 圏  $\mathcal{D}$  が  $\mathcal{C}$  の**充満部分圏** (full subcategory) であるとは, 次の2条件が満たされることを言う:

- (1) クラス  $\text{Ob}(\mathcal{D}) \subset \text{Ob}(\mathcal{C})$ ,
- (2)  $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{D}), \quad \text{Hom}_{\mathcal{D}}(X, Y) = \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y).$

### 定義 1.8: 反対圏

圏  $\mathcal{C}$  に対して, その**反対圏** (opposite category)  $\mathcal{C}^{\text{op}}$  を次のように定義する:

$$\begin{aligned} \text{Ob}(\mathcal{C}^{\text{op}}) &:= \text{Ob}(\mathcal{C}), \\ \text{Hom}_{\mathcal{C}^{\text{op}}}(X, Y) &:= \text{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, X) \quad \forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C}^{\text{op}}) \end{aligned}$$

## 1.2 関手と自然変換

圏を対象と考えたとき, 射にあたるのは**関手** (functor) である.

$\mathcal{C}, \mathcal{D}$  を圏とする.  $\mathcal{C}$  と  $\mathcal{D}$  の間の対応

$$F: \mathcal{C} \longrightarrow \mathcal{D}$$

は次の2種類の対応付けから成るとする:

- (1)  $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して, 記号  $F(X)$  で書かれる  $\text{Ob}(\mathcal{D})$  の元を一意に対応づける<sup>\*2</sup>.  
 (2)  $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して, 射を移す写像

$$F: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(Y)), f \longmapsto F(f)$$

を対応付ける.

#### 定義 1.9: 共変関手

$F: \mathcal{C} \longrightarrow \mathcal{D}$  が**共変関手** (covariant functor) であるとは, 以下の2条件を満たすことを言う:

**(恒等射を保つ)**  $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して

$$F(1_X) = 1_{F(X)} \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(X))$$

が成り立つ.

**(合成を保つ)**  $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y), \forall g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(Y, Z)$  に対して

$$F(g \circ f) = F(g) \circ F(f) \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(Z))$$

が成り立つ.

射の向きを逆にすると**反変関手**の定義になる. いま  $\mathcal{C}, \mathcal{D}$  を圏とし,  $\mathcal{C}$  と  $\mathcal{D}$  の間の対応

$$F: \mathcal{C} \longrightarrow \mathcal{D}$$

は次の2種類の対応付けから成るとする:

- (1)  $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して, 記号  $F(X)$  で書かれる  $\text{Ob}(\mathcal{D})$  の元を一意に対応づける.  
 (2)  $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して, 射を移す写像

$$F: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(Y), F(X)), f \longmapsto F(f)$$

#### 定義 1.10: 反変関手

$F: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$  が**反変関手** (contravariant functor) であるとは, 以下の2条件を満たすことを言う:

**(恒等射を保つ)**  $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して

$$F(1_X) = 1_{F(X)} \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(X))$$

が成り立つ.

**(合成を保つ)**  $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y), \forall g \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(Y, Z)$  に対して

$$F(g \circ f) = F(f) \circ F(g) \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(Z), F(X))$$

が成り立つ.

関手を対象と考えたときに, 射にあたるものが次に定義する**自然変換**である:

<sup>\*2</sup> いわば, 「写像」  $F: \text{Ob}(\mathcal{C}) \rightarrow \text{Ob}(\mathcal{D})$  とでも言うべきもの.

### 定義 1.11: 自然変換

2つの共変関手  $F, G: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$  について、以下のような対応  $\varphi: F \rightarrow G$  のことを**自然変換** (natural transformation) と呼ぶ:

- (1)  $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して、射

$$\varphi_X \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), G(X))$$

を対応付ける。

- (2)  $\forall f \in \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$  について図式 1.1 が可換になる。

$$\begin{array}{ccc} F(X) & \xrightarrow{F(f)} & F(Y) \\ \downarrow \varphi_X & & \downarrow \varphi_Y \\ G(X) & \xrightarrow{G(f)} & G(Y) \end{array}$$

図 1.1: 自然変換

共変関手  $F$  から  $G$  への自然変換全体が成すクラスを  $\mathbf{Nat}(F, G)$  と書くことにする。

### 定義 1.12: 自然同値

2つの共変関手  $F, G: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{D}$  の間の自然変換  $\varphi: F \rightarrow G$  を与える。

- $\varphi$  が**自然同値** (natural equivalence) であるとは、 $\forall X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して  $\varphi_X \in \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), G(X))$  が**同型射**であることを言う。
- 共変関手  $F, G$  が**自然同値** (naturally equivalent) であるとは、 $F$  から  $G$  への自然同値が存在することを言う。
- 共変関手  $F$  に対し、 $\text{id}_F(X): F(X) \rightarrow F(X)$  により定まる  $F$  から  $F$  自身への自然変換  $\varphi$  を**恒等自然変換** (identity natural transformation) と呼ぶ。

**定義 1.13:**

共変関手  $F: \mathcal{C} \longrightarrow \mathcal{D}$  を与える.

- $F$  が**忠実** (faithful) であるとは,  $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して写像

$$F: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(Y)), f \longmapsto F(f)$$

が単射であること.

- $F$  が**充満** (full) であるとは,  $\forall X, Y \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  に対して写像

$$F: \text{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \longrightarrow \text{Hom}_{\mathcal{D}}(F(X), F(Y)), f \longmapsto F(f)$$

が全射であること.

- $F$  が**本質的全射** (essentially surjective) であるとは,  $\forall Z \in \text{Ob}(\mathcal{D})$  に対して  $X \in \text{Ob}(\mathcal{C})$  が存在して  $F(X)$  が  $Z$  と同型になること.

忠実充満関手のことを**埋め込み**と呼ぶことがある.